

# 子どもアーカイブスの夢と白梅学園

## ―白梅学園の将来構想

学校法人白梅学園理事長

小松 隆二

### 1 学校法人・大学が博物館・アーカイブスを持つ意義

#### (1) 博物館・アーカイブスの役割

大学・学校法人が高く評価されるかどうかの尺度の一つとして、博物館やアーカイブスのような高度の文化・学術施設の有無が問われることがある。

たしかに欧米ではもちろん、日本でも著名な大学・学校法人は、博物館、アーカイブス、ないしは特色のある文庫などそれに準ずるものを持っている。しかも、目的や内容も、一般的にはどこにでもあるといったありふれたものではなく、個性・特徴、それに高い質の伴うものである。そこにこそ、大学・学校法人のステータス・シンボルとして博物館やアーカイブスの存在が評価される意味もあるのである。

白梅学園でも大学・大学院がととのったので、そろそろそういったものを心掛ける必要がある。ただし、博物館やアーカイブスをもつということは、大学として、あるいは学校

法人として外見的に格好付け・箔付けのためにそうするのではない。大学の役割の一つとして、貴重な文献・資料類の発掘や保存、継承や公開があるが、それに応えるのが大学の図書館、あるいは博物館やアーカイブスだからである。

さらに、それら貴重・稀少な文献・資料類を拠り所にして、研究でも、狭い特定の分野やテーマであるとしても従来にない高い水準で、新しい価値の付加された成果を上げることが可能である。その文献・資料を介して学内外の秀でた研究者を一同に集めるチャンス・可能性が増えるからである。学部で授業を依頼するのは違い、特定テーマの研究、調査、発表等に絞るので、学外のトップレベルの研究者も学外研究員として招聘することが比較的容易なのである。それによって学内の若手教員などに刺激を与え、学内外の力の結集・発揮を促し、学界・学会でも高く評価される研究への挑戦、さらに成果の実現や発信も期待できるのである。

このように、大学・学校の図書館やアーカイブスがまちのコミュニティ・ライブラリーと異なるのは、いくつかの役割の中でも、発掘と保存の責務、さらにそれらを活用する研究・教育機能も負っている点である。

発掘と保存というのは、質とは関係なく、ただ予算や住民のニーズにあわせて文献・資料類を購入し、その集まったものを保存することではない。発掘とは、主に未だ知られていなかった文献・資料類の掘り出し・発見である。また保存・継承とは、そういった価値のある稀少書・稀覯書、あるいは高い成果をあげた著作類を中心にした保存・継承である。ただ集まったもの、高価なもの、骨董品的なものを保存するということではない。大学の目的や理念を遂行する上で不可欠なもの、主要専攻科目の所蔵文献・資料の総合性・体系性を実現するのに必要なもの、さらには未発見・未発掘であったもの、稀少状態あるいは絶滅や消滅を危惧されたりしているものを主として収集、保存、継承するのである。

実際に、博物館やアーカイブスという以上、どこにでもある文献、資料、モノの収蔵、保存、公開だけではほとんど評価は得られない。大学・学校法人として、博物館やアーカ

イブスを通して、目的・理念に沿うメッセージ、例えば研究成果に基づく提言、理論、思想、あるいは具体的に論文や著作といったものを発信できるものでなくてはならない。それには、小規模の大学・学校法人ならば、広がりや量を追うよりも、特定の分野・テーマに絞り、かつオリジナルなもの、個性的なもの、それでいて高度なものを目ざした方が意義も、可能性も高いということになる。

## (2) アーカイブスが研究の閉鎖性を打ち破る可能性

以上のように、博物館やアーカイブスの設置は、施設・設備の整備や所蔵品の収集・保存・公開のみで終わるのではない。その創設の精神や理念、また継承、公開する事業というのは、そこにとどまらず研究・教育など多様・多彩な方向に活動・役割を拡大する可能性を持っているのである。

実際に、大学・学校法人の博物館・アーカイブスなら、その精神や理念、また内容や水準によって、研究・教育の高度化を推進する活動・役割、大学・学校法人の特徴・個性を磨き上げる活動・役割を果たせるであろう。また並の大学・学校法人のようにただ内に閉じこめるのではなく、一大学・一学校法人を越えて連帯・共創の姿勢で科学・真理の解明に取り組むのを支援する活動・役割も果たせるであろう。

特に研究・教育に関わる文献・資料類は、学問・学術の本質・性格からも一大学・一法人が排他的に独占すべきではない。この点は、学問の根本にも関わる重要なことであるが、まともな議論されることは少なかった。

日本の大学では、入手した文献・資料については、公私の大学・学校を問わず自己資金を投じて購入したという理由で公開せずに学内で排他的に独占利用する例が少なくない。購入したものを整理さえせずに長年倉庫や隅っこにしまったままの対応さえ稀ではない。そのような公益認識に欠けるあり方は、科学・真理の解明に関わる大学・学校法人のあり

方としては好ましい姿勢とは思えないが、日本の大学では、そのように文献・資料の独占傾向が強い。

それに対して、私も、アーカイブス活動を通して文献・資料を内部で独占するよりも、特定の分野、ある特定のテーマを通してであれ、公開することによってそういった方に風穴をあけることができるのではないかと考えている。それによって広く他の大学・他の学校法人や研究者とも連携・連帯、あるいは共創を目ざす共同研究などを組める可能性も増えてくるであろう。

ともかく、真理の解明につながる新しいもの・オリジナルなものを切り拓く挑戦と共創の理念・姿勢があれば、小規模の大学・学校法人にも、博物館・アーカイブスの事業・活動を通して研究面でも先導的な役割を担うチャンスが生まれるのである。

幸い、博物館・アーカイブスは、分野、領域、テーマ、規模などにおいて多様である。現実を見れば、総合性できわ立つ例、ある特定の分野やテーマで個性を出す例、稀少なものをただ一点あるいは少数所蔵するだけで世界的に注目される例、さらに所蔵文献・資料を手段・武器にアーカイブスに研究機能も持たせ、研究成果の発表・発信に重点を置く例など、多様性が明らかであろう。それ故にこそ、小規模の大学や学校法人でも、博物館やアーカイブスを持てるし、さらにはそれに明快な個性や特徴を付与することによって、大学・学校法人の基軸となる研究、教育、地域活動全体の水準の引き上げにも活用できるのである。

## 2 小規模大学・学校も誇れる博物館・アーカイブスのあり方

博物館、アーカイブスのあり方で多いのは、一方で総合的なもの、他方で領域やテーマを絞る専門性の高いものである。そういった施設は至るところで設置・展開されている。それに比べて、一点の所蔵だけでも注目されるほどの例はそうあるものではない。それで

も、特定の人物、地域、社会に焦点を当てたものを含めれば、かなり見られる。

その中でも極端な一点主義の例としては、やや別格で例外ともいえるほどの事例ではあるが、慶應義塾大学がグーテンベルク聖書、通常四二行聖書といわれるものを購入、収蔵した例が典型的であろう。グーテンベルククラスになると、一点でも、多量な資料・文献に勝る価値・意義を持っているからである。現に慶應義塾大学がグーテンベルク聖書を収蔵することになった時には、すでに収蔵しているイギリスの大英博物館等から祝電が届いたし、それだけで世界的レベルの図書館のステータスを与えられるほどの評価を受けた。また、三越本店でその現物を公開した展示会には、連日長蛇の列をなすほど見物客が訪れた。その関心の高さや広がりには、三越関係者も驚き、グーテンベルクに対する認識を改めたほどであった。

ちなみに、慶應義塾のグーテンベルク聖書の購入価格は、一〇億円であった。アメリカのオークションで入手した丸善の好意で、慶應義塾に収蔵されることになったものである。小さな大学・学校法人では購入できる価格ではないが、現在は万一市場に出ても、一〇億円ではとても購入できないといわれている。

グーテンベルク聖書が一点のみで注目されるのは、古書の蒐集家や研究者の夢・垂涎の的であるように、同書が活版印刷の最初のものとして近代印刷の源流に位置すること、それにもと二〇〇冊くらいしか印刷されず、その上現在世界で存在が確認されている部数も僅かであること、しかもそれらが世界のトップクラスの大学や図書館、それも全てキリスト教圏の国々に収まっているので市場に出ることがまずないこと、つまりアジアの大学がグーテンベルク聖書を収蔵できるとは考えられていなかったことからである。

例えば、大英博物館、オクスフォード大、ケンブリッジ大、イートン校、パリ大、モスクワ大、アメリカ国会図書館、ハーバード大など世界的によく知られる大学・学校や図書館は、グーテンベルク聖書を所蔵している。そんな中で、初めて非キリスト教圏・アジアの大学が所蔵することになって、世界を驚かせたのである。

こんな例を見ると、博物館・アーカイブスのハードルが高くなりそうであるが、白梅学園のような小規模の大学・学校法人が高いレベルの博物館やアーカイブスを持つのは無理ということではない。博物館やアーカイブスは多様であるだけに、小さいながらもそれぞれの大学・学校法人の目的、理念、理想に沿う個性・特徴を打ち出せば、いくらでも存在価値を認められ、評価される博物館・アーカイブスになる可能性はある。

白梅学園も、白梅らしい特色を出せる子ども（学）、保育（学）、福祉、心理学等に係るテーマに焦点をあてれば、他の大学や博物館からも注目され、社会貢献・地域貢献もできる博物館・アーカイブスの実現は可能である。そんな中で、私なりに考えうる一つは、子どもアーカイブスである。それこそ、現在本学唯一の大学学部である子ども学部、ひいては子ども学の発展にも寄与することができるであろう。

### 3 白梅学園における子どもアーカイブスの実現性

白梅学園における子ども（学）をめぐる文献、資料類に関する現在の所蔵状況をみると、想像以上のものがある。アーカイブスなどの実現性・可能性が十分にあるといえるほどである。

例えば、白梅学園大学図書館には、すでに童謡詩人・童話作家・児童文学者である清水たみ子さんから寄贈された文庫、あるいは以前から所蔵されている絵本の文庫などがある。清水文庫には、異聖歌と夫人（野村千春）の書・絵画・書簡など生のもの、多くの詩集、雑誌、北原白秋ら何人かの全集類が収まっている。

また、絵本は、授業などとの関係で、七〇〇冊ほど収蔵されている。ただ、世に出ている絵本全体の膨大な規模を考えると、まだ質・量ともアーカイブスの柱になるには工夫が必要である。しかし、今後個性・特徴を出すことによって、柱の一つになる土台は用意されていると考えてよい。

さらに、大学付属の白梅幼稚園には、紙芝居が二六〇点ほど所蔵・活用されている。なかには久保田浩先生の創作・創画になるオリジナル紙芝居も含まれている。また幼児向け図書も一五〇〇冊ほど所蔵されている。いずれも、子どもアーカイブスには基本的な柱になりうるものである。

他に白梅学園関係者の所蔵になるものには、明治期の旧制中学校に通う生徒の年間諸経費（受験料・授業料から日常の学校生活等の経費に至るまで）を数年にわたって記録した家計簿、第一次世界大戦の末期から終了直後の大正七年から九年にかけての大阪・茨木中学校生徒の「生徒日誌」（学校に提出したもので、所々に教員のコメントが赤字で入っている）、大平洋戦争下、シンガポール陥落の報を知った都下の小学校で、生徒たちにそれに関する感想を綴らせた作文（以前にこの生の原稿を毎日新聞に提供したところ、日本軍のシンガポール攻略に「感動」した生徒たちがその後どのような成長・軌跡をたどったのかを調べてくれ、その足跡・暮らしを明らかにしたドキュメントが一〇回ほど連載され、好評であった）や「空襲」など別のテーマによる作文の生の原稿等、他には存在しないものがある。

その他、白梅学園関係者には、子ども（学）に関する明治から昭和にいたる雑誌類が意外に多く蒐集されている。例えば、戦前の雑誌に限っても、創刊号を含むものでは、『児童研究』（明治三二年）をはじめ、『小学之友』（明治二一年）、『こども』（明治三三年）、『小学生徒之友』（明治三三年）、『少年史海』（明治二七年）、『実業少年』（明治四一年）、『海外少年赤十字彙報』（昭和三年）、『児童時代』（昭和五年）、『日本男児』（昭和七年）、『童話研究』（昭和一〇年）、『昔話研究』（昭和一〇年）、『児童劇場』（昭和一一一）などがある。創刊号が含まれない収集雑誌となると、『小学雑誌』『小学教文雑誌』『女学雑誌』『文明之児童』『日本之少年』『幼年雑誌』『少年学術共進会』『少年園』『少文林』『小国民・少国民』『新国民』『少国民文化』『国民学校』『少年界』『赤い鳥』『教育の世紀』『童話の社会』『少年世界』『中学世界』『子供之友』『児童』『児童生活』『児童研究所紀要』等多数にのぼ



る。

子供（学）をめぐるアーカイブス・文庫では、膨大な量と質を誇る滑川道夫文庫（神奈川近代文学館）などには量的には到底及ばないが、それら著名文庫・巨人文庫にも不足している領域・側面を補うものも、白梅学園周辺には上記のようにかなり揃っている。それらを軸にさらに努力すれば、白梅学園にも個性的で魅力のある子どもアーカイブスあるいは子ども文庫が実現できると考えている。

白梅学園に小規模でもレベルの高い博物館やアーカイブスを実現するには、まだ数年を要しよう。子ども（学）以外のテーマにも可能性のあるものが出てくることも考えられなくはない。いずれにしろ、多くの人たちの協力を得て、他にない個性・特徴を持つ博物館かアーカイブスの設置、公開・サービスの提供の夢が現実になる日、それを通して白梅学園が研究面でも未開拓・未発掘の課題にどんどん挑戦する日、さらに子ども学の発展などに寄与する新しい成果を継続的に発信できる日を楽しみにしている。